



関西 3 支部新春合同例会 終了しました

「もしドラッカーが大学図書館をつくったら」

～ ワークショップ ～

- ◆ 日 時：2012年1月14日（土）13：30～16：30
- ◆ 場 所：京都市国際交流会館 第二会議室
- ◆ 講 師：市川 充氏（アミュレット株式会社代表取締役）
（略歴）

1967年 東京都生まれ、1989年図書館情報大学図書館情報学部卒業、1993年成城大学経済学部卒業、ドラッカー学会会員、アミュレット株式会社（旧社名市川充商店）代表取締役。同社にてLinuxのシステム開発、商品開発に携わり、現在も活動中。2007年よりIT事業におけるグループワークに興味を持ち、筑波大学知識情報図書館学類、中央大学理工学部経営システム工学科、において、演習支援を行い、好評を得ている。

◆ 内 容：

ドラッカー学会会員で図書館情報大学 OB の市川充氏が、筑波大学知識情報図書館学類、中央大学理工学部経営システム工学科等の演習で好評を博しているグループワークのエッセンスを体験していただき、新しい機会に焦点をあてた思考法を訓練します。

※なお、4ページより、今野氏による参加報告原稿を掲載しています。

[目 次]

関西 3 支部新春合同例会開催のご案内(終了しました)	…	1
図書館総合展に参加して	上山卓也	… 2
大学図書館問題研究会 関西 3 支部新春合同例会 「もしドラッカーが大学図書館を作ったら～ワークショップ～」に参加して	…	4
例会初参加の感想	今野創祐	
本の紹介 第 8 回 科学者として生き残る方法	坂本拓	5

○ ご意見・ご要望、投稿は下記、電子メールまたは URL へお寄せください。

電子メール：kyoto@daitoken.com （大学図書館問題研究会京都支部）

URL：<http://www.daitoken.com/kyoto/index.htm>

図書館総合展に参加して

上山 卓也

2011年11月9日～11日に開催された第13回図書館総合展に赴くことが叶いました。3日間にわたり公式・非公式の多種多様な行事が開催されており、『ゆりかもめ』読者も大勢参加されたのではないかと思います。

筆者は11月10日～11日午前中まで滞在しましたが、「図書館総合展」を余すことなく伝えることは、私の力量では不可能です（それだけに、まだ参加されていない方は、是非足を運んでいただきたいと思います）。そこで、参加したフォーラムのひとつである「デジタルアーカイブを繋げる」簡単に紹介し、皆様のご高覧を賜りたいと存じます。

（フォーラム「デジタルアーカイブを繋げる：PORTAによる「これまで」とNDLサーチによる「これから」）

フォーラムでは、国立国会図書館の柴田正樹氏（「デジタルアーカイブを繋げる：PORTAから学んだこと」）、人間文化研究機構の山田太造氏（「人間文化資源の統合検索」）、横浜市中心図書館の澤田るい氏（「事例報告：横浜市中心図書館「都市横浜の記憶」：つながるアーカイブをめざして」）、最後に国立国会図書館の西中山隆氏（「国立国会図書館サーチのこれから」）の4氏から発表あるいは報告がありました。以下、順を追って紹介します。なお配布資料が国立国会図書館のウェブサイトで公開されているので、ご興味のある方はご覧ください。（http://www.ndl.go.jp/jp/news/fy2011/1192508_1670.html）。

柴田氏（「デジタルアーカイブを繋げる」）は、デジタルアーカイブ連携の意義として、連携によりそれぞれ独立したデジタルアーカイブ間の補完が可能となり、コンテンツ間の新たな関係が見いだされることで、コンテンツに新たな価値が発生する、と指摘されました。またこれらデジタルアーカイブのコンテンツをワンストップで検索できるポータルサイトであるPORTA（<http://porta.ndl.go.jp>）は、2011年11月1日現在183種類のデジタルアーカイブと連携していること、PORTAの運営を通じて、コンテンツ間の相乗効果向上には連携数の増加が重要であること、一方的なデータ収集だけではなく、検索用APIの提供などを通じたデータ提供など「連携し、連携される」ことが大切であること、連携構築にはメタデータの収集・検索方法やデータ項目の対応付けがカギとなる、と述べられました。

山田氏（「人間文化資源の統合検索」）は、人間文化研究機構の統合検索（<http://int.nih.jp/>）について紹介されました。現在122種類のデータベースを運営しており、資料目録の情報ひとつとっても、それぞれの項目数や内容が全く異なっている、これらをSimple Dublin Coreを共通メタデータとしてマッピングすることにより、統合検索を実現することができた、さらに統合検索では、検索結果の表示方法を工夫したり、時間情報や空間情報による検索、さらに検索結果を年表上に、あるいは地図上にまとめて表示するといった、見せ方を工夫していると紹介されました。データベースをまとめて検索することができる点に特徴があり、思わぬところに思わぬ資料を発見できるといった反面、大量の情報をいかに見やすく提示するかが課題である、とのこと。

澤田氏（「事例報告：横浜市中心図書館「都市横浜の記憶」」）は、米国議会図書館の“American memory”（<http://memory.loc.gov/ammem/index.html>）を意識して作成されたデジタルアーカイブ「都市横浜の記憶」について、PORTAとの連携をおこなった直後からアクセス数が急激に増加した、とのこと。また今後の方向性として、国立国会図書館では収集しきれない、横浜地域の雑誌記事の収集・電子化や、各地域図書館が収集

した地域情報を中央図書館が一元化して横断検索できる仕組み、「横浜の中の PORTA」の構築を進めたいと述べられたのが印象的でした。

最後に西中山氏（「国立国会図書館サーチのこれから」）は、NDL サーチのこれから、として、連携アーカイブを増やし各機関のデジタルアーカイブの可視性向上に貢献する、API を通じてメタデータ流通促進に貢献する、外部を含む各種 Web サービスや研究機関との連携により、より先進的で高度な検索サービスの提供実現を目指す、という NDL サーチの目指す方向について改めて言及がありました。

（若干の私見）

このフォーラムに出席したきっかけは、現在私が勤務している京都大学附属図書館電子情報掛が管理する「貴重資料画像データベース」（<http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/index.html>）の目録情報が構造化されていないため、今後メタデータを構築するには何を考えればよいのか、何かヒントを得ることはできないか、との思いを持っていたためです。

4 氏の発表内容をまとめると、(1) デジタルアーカイブを連携すると、コンテンツの価値がより高まっていいことがある（今回の報告では、アクセス数増加、横断検索）、(2) 連携には目録情報が重要になる、Dublin Core（それを基に作成された DC-NDL）が交換フォーマットである、(3) 連携の媒介は国立国会図書館サーチ（あるいは PORTA）である、の 3 点になるかと思えます。残念ながら私の知りたかった内容、すなわち実務家から見た各種メタデータの特徴や比較、メタデータの記述方法、あるいは裏話のようなものは、ほとんどありませんでした。

ですが、重要な課題を突きつけられた感に襲われました。「京都大学の中で、きちんとデータ連携を図っていますか？」。

京都大学では、附属図書館、総合博物館、大学文書館の各組織が、それぞれの機関の目的ごとに複数のデータベースを構築しています。附属図書館だけでも、「蔵書検索 KULINE」（<https://op.kulib.kyoto-u.ac.jp/webopac/catsrd.do>）、「学術情報リポジトリ KURENAI」（<http://repository.kulib.kyoto-u.ac.jp>）、「貴重資料画像データベース」を設置しています。総合博物館には「研究資源アーカイブ」（<http://www.rra.museum.kyoto-u.ac.jp/>）、大学文書館には「所蔵資料検索システム」（<http://kensaku.kual.archives.kyoto-u.ac.jp/bunshokan/index.html>）、ほかにも京都大学オープンコースウェア（<http://ocw.kyoto-u.ac.jp/>）、さらに各学部には先生方が構築されている研究資源、成果物、あるいは研究データを集めたアーカイブが存在していることでしょう。これらの各データベースは、学内ですが連携がなされていません。

一例を挙げましょう。戦前に当時の東方文化研究所（現在は京都大学人文科学研究所附属東アジア人文情報学研究センター）が、現在の中国山西省で雲崗（うんこう）石窟の調査をおこないました。報告書は 16 巻（と補遺）にまとめられ、現在は電子化されて「学術情報リポジトリ KURENAI」で公開しています。

この雲崗石窟の調査最初期に撮影された映画フィルムが、2008 年に発見され、現在は電子化がおこなわれており「研究資源アーカイブ」で公開されています。

残念ながら（現担当者がこのような言葉を使ってはいけないのですが）これら 2 つの資料を橋渡しする記録は、目録上存在していません。

貴重資料画像データベースに掲載されている資料と、その資料を素材にした研究業績、いずれも附属図書館の内部で構築されているデータベースに掲載されていますが、目録上は関係がたどれません。博士論文とその公刊物の関係についても同様ではないでしょうか。

学内外の皆様のご理解もあって、学術情報リポジトリ KURENAI は、本文データが 10 万件に近づきつつあります。貴重資料画像データベースも約 4,000 件を収録しており、毎年少ないながらも新規搭載を行っています。

先人が構築したこれらの膨大な集積を活性化するには、今後どのような活動をおこなってゆけばよいのか。データを増やすことにばかり目が行きがちな日常を反省し、次に繋げてゆく機会にならないかと、ふと思った次第です。

うえやま たくや (京都大学附属図書館電子情報掛)

大学図書館問題研究会 関西3支部新春合同例会

「もしドラッカーが大学図書館を作ったら～ワークショップ～」に参加して

例会初参加の感想

今野 創祐

私は昨年9月から大学図書館に勤務することとなった新人です。初めて大学図書館という世界で働くこととなった私は、図書館についても大学についても、当時、ほとんど何も知りませんでした(今も?)。そんな中で或る先輩が、大学図書館についていろいろ学べる場として大図研を紹介してくださったことが、私が大図研に入会したきっかけです。

昨年11月に大図研の京都支部に入会し、他の会員の方々と親睦を深めることはありましたが、例会への出席は初めてであった私にとって、このたびの例会は貴重な体験となりました。

まずこのワークショップでは、AMULET(株)代表取締役の市川充氏の助言に基づき、アミュレット事業戦略検討シートというワークシートに書かれた、「お客様は誰か?」から始まり「私たちの事業はどうあるべきか?」で終わる9つの質問に、1分～3分以内に答えるという作業を行いました。

この作業を通じて、私は、普段の業務の中ではあまりしっかりと向き合うことのなかった「私たちのとりまく環境ではどんな新しい機会があるか?」「私たちの事業はどうなるか?」といった問いに向き合うことができました。これはとても貴重な体験であったと思います。私はこの仕事を始めて四ヶ月と少しということもあり、まだまだ日常の業務においては覚えること、学んでいくことが多く、どうしてもそうしたことを吸収していくことばかりに気が向いてしまい、「そもそも、私たちの事業とは何だろう」といった根本的な問いについて考える機会はほとんどありませんでした。この作業によって、初めて私はそうした根本的な問題について考えることができたと思います。

続いて、5人1組のグループワークを行いました。今度は京都の山内浄水場跡地に国立大学を新設するという架空の設定の下で、先ほどと同じワークシートにそれぞれ自身の考えを書き込み、それを皆で検討するという作業を行いました。

この作業を通じて私は、改めてコミュニケーションの難しさと大切さを学びました。このワークシートにおいて提示される問いは漠然としたものが多く、まずその問いをどのように解釈するかといった段階で、メンバーの間で食い違いが見られることもありました。私は、こうした食い違いは、日常の業務においても同様に起こりうる(起きている?)のではないかと思います。私たちが普段の業務において直面する問題も、しばしば漠然としたものであります。そうした問題を解決するにあたり、そもそもその問題をどのように捉えるかといった段階で、職場のメンバーの間で食い違いが起こるということも、大いにあるのではないのでしょうか。

こうした食い違いを解消する手段は、やはり今回のグループワークで行ったように、皆でしっかりと話し合うということに尽きるでしょう。お互いにしっかりと相手の話を聞き、自分の考えを述べることで、自分がどのように問題を認識しているのか、そして職場の同僚がどのように問題を認識しているのかを確認し、そこで食い違いが見られれば、正しい問題認識の在り方を模索する。こうしたプロセスが、職場における問題解決においても、求められるのではないかと思います。

最後に、各班の発表があり、私は皆さんの前で、グループを代表して発表する機会を与えられました。その際、私たちの班の発表の内容は「フォーカス&ディープ」(焦点を絞って、深く掘り下げる)になっている、と市川氏よりお褒めの言葉をいただくことができました。とはいえ、これも(少なくとも私は)意図した上でのことではなく、結果としてそうした観点から良いものができた、という面があります。今後は、しっかりと「フォーカス&ディープ」を意識した上で、発表内容を作り上げていくことを心がけよう、と思いました。

私は大学時代、経営学を専攻しておりましたが、ドラッカーの思想に触れる機会には恵まれませんでした(ベストセラーとなった『もし高校野球の女子マネージャーがドラッカーの『マネジメント』を読んだら』も、不勉強ながら未読です)。この例会での体験をきっかけとして、ドラッカーの思想についても学んでみようかな、と思いました。

いまの そうすけ(京都大学文学研究科図書館)

本の紹介 第8回

『科学者として生き残る方法』

坂本 拓

日本の図書館員は、何故だか文系(特に文学部)出身者がとても高い割合を占めています。

だから、文系の学部の利用者がどんなことを勉強しているのか、研究のためにどのように図書館とその資料を使っているのか、というのは私たちもある程度理解できます。しかし、それが理工系の学部となるとさっぱりわかりません。ホントのところ、インパクトファクターって、そんなに大事なの?理論系の研究者と実験系の研究者ってそんなに違うものなの?理工系の学会、ってどんな感じなの?などなど。これらのモヤモヤがあると、私たちが先生や学生に、機関リポジトリの案内をする時や、文献検索の利用者教育をする時、大きな不安が付きまといまいます。それを払拭するのに、少なからず役に立つのが今回ご紹介するこの本です。

この『科学者として生き残る方法』日経BP社(2008年)という書籍は、タイトルの通り、若手の理工系研究者に向けて、研究者として成功するための様々な助言が実例とともにちりばめられている本です。著者であるフェデリコ・ロージ氏とテューダー・ジョンストン氏はともに物理学の教授で、カナダのケベック大学の大学院生向けに、フェデリコ氏が担当された「科学者のためのサバイバルスキル」という授業の内容が、この本のベースになっています。研究に関する実務的な点から、目上の研究者とのコミュニケーションという人間臭い点に至るまで、非常に丁寧に書かれています。対象が、大学院に入りたての学生、という理系の研究についてまだぼんやりとしかわかっていない層

を主な対象にしているのですが、これが、ちょうど大学図書館員にも合致してくるので。つまり、「理工系研究職の紹介」という役割を、この本は非常に強く担っているといえるでしょう。以下、紙幅の都合で駆け足になりますが、章ごとに簡単に内容を紹介します。

第一章：研究者には、実験系・理論系・一匹狼型・協調型・現場型・マネジメント型など、様々なタイプがあることが紹介され、自分がどれに最も適性があるのかを見極めることの重要性が説かれています。具体例が多く、興味深いです。

第二章：海外での研究や、結婚などの私生活も含め、研究者としてキャリアを積んでいく上でのプランについての章です。

第三章：ここからメインディッシュです。査読についての詳細な説明がこの章の肝になります。他、特許などの知的財産権についても紹介があり、今日の「科学」がどのように成立し動いているのか、がテーマになっている章です。

第四章：ここは、研究者がいかにして名声を獲得するか、ということが書かれており、学会発表についてや、助成金の獲得の際の注意点などが詳述されています。

第五章：「自分の研究をどう伝えるか」が、タイトルになっており、その名のとおり、論文を執筆する際の見落とされがちだが重要な注意点、レター論文と通常論文の違い、博士論文、学会でのプレゼンテーションについて、などが扱われています。

この手の書籍は、著者の国の事情、研究領域などによって左右されるため、その点を斟酌する必要がありますが、霧の向こう側にあった、理工系研究者の研究スタイルが、少し見えてきます。このような内容にご関心をお持ちの方、特に理系の図書館で業務をされている方には、一読をお勧めいたします。そして、興味をもたれた方は、この手の書籍は他にもたくさんありますので、複数冊読まれることをお勧めいたします。分野に影響されない、普遍的な共通点が見えてきます。

以前、私はある事務系の先輩から、図書系職員は「教育研究支援」をしないとイケないのに、今は「教育研究支援のための事務」しかできていない、と言われたことがありました。一朝一夕にできるようになるものでもありませんが、その努力は続けていきたいと思います。

さかもと たく（京都大学工学研究科桂地球系図書室）

◇ 会費納入のお願い ◇

会員のみなさまにおかれましてはご健勝のことと存じます。

大図研会費および京都支部会費の納入をお願いしているところですが、納入率は依然思わしくない状態にあります。既に2011年度（大図研会計年度2011.07-2012.06）に入っておりますので、2011年度の会費の納入をお願い致します。また、2010年度以前の会費をお納めいただいていない会員のみなさま、一刻も早い会費の納入にご協力いただきますようお願い致します。

会費は、¥7,000（大図研会費：¥5,000+京都支部会費：¥2,000）です。

会費は下記口座に郵便振替でお送りいただくか、お近くの支部委員におことづけください。

郵便振替振替口座番号 01090-4-5904 大学図書館問題研究会京都支部

また、ご不明な点は大学図書館問題研究会京都支部（kyoto@daitoken.com）まで。